

棺に横たわる入棺体験・「遺影」撮影会...

「終活」もっと身近に

人生の最終章をよりよく迎えるための「終活」が中国地方でも広がっています。実際に棺に横たわってみる入棺体験も人気で、タプー視されてきた「死」に関する話題が、少しずつオープンになってきているようにです。

ふた閉まり「生きる」



④遺影の枠に収まって自分の葬儀を想像するコーナー⑤棺に横たわって考えるを閉められると生や死について考える人が多いという＝いずれも山口県萩市



山口県萩市で今月2日、「HAGI産業フェスタ」があった。会場の一角に設けられた入棺体験コーナーでは、様々な年代の男女が物珍しそうに足を止め、木の箱の中に横たわった。スナップはふたを閉めると、ゆっくり10数分、ふたに閉じられた小窓を開けた。市内の会社員中村恵美さん(28)は、終活という言葉を知ったのはあるが、自分のこととして考えたことはなかった。「色々体験できるのはいいかも」と入棺。ふたが閉まったら怖かった。精いっぱい生きようと思った」と話した。看護師の男性(30)は棺の中で、7年前に亡くなった祖母のことを思い出したという。「親もいつどうなかわからない。感謝の気持ちを伝えたい」。3人を育て中の長岡ひとみさん(33)は「家族を残して死なない。仕事もあって忙しかれど、日々子どもの話聴くなど、今できることしたい」と語った。

定期的に関わっている入棺体験会もある。東京都港区にあるエゴ棺メーカー「ウィルライフ」は、上級終活カウンセラーの坂部篤志さん(50)と共に昨年3月から毎月入棺体験会を開いている。「終焉を知ることによって今をより楽しく生きてほしい」と坂部さん。お茶を飲み、お菓子をつまみながら参加理由を話し、紙と間伐材で作られたエゴ棺に3分間ずつ入った後、感想を語り合う。参加者は30、60代と幅広い。増田進弘社長(61)は「6、7人の定員が毎回すぐに埋まる」という。最近では「1回目の体験のあと身内を亡くし、もう一度入ってみようと思った」「参加者との葬儀や死についてのディスカッションが良かった」というリピーターも増えている。

各地でイベント／カウンセラー、中国地方に169人

今年8月に山口市で開催された終活イベントには約150人が訪れた。会場には入棺体験のほか、葬儀、お墓、年金、相続、遺言などの相談ブースが設けられた。遺影にも使える肖像写真撮影会には長蛇の列ができた。

同イベントなどで講演した終活カウンセラー協会の武藤頼朝代表理事(43)は「3年前ほど前から東京都都市部で終活ブームに火がつ

いたが、ここ1年10カ月ほどで地方にも浸透した」と話す。今年の講演依頼はほとんどが地方という。終活への関心の高まりについて、武藤さんは昔は地域でやっていたことが家族の問題になり、さらに夫婦や自分自身で考えなければいけなくなったからだと話す。2011年から始まり、様々な終活の相談にのったり、弁護士などの専門家につないだりする「終

活カウンセラー」の講座受講者は全国で約6千人を超えている。中国地方では計169人(岡山53人、山口52人、広島34人、島根17人、鳥取13人)がカウンセラーとして活動中だ。鳥取、島根両県で展開する葬儀会社「葬仙」は葬儀の前後の手続きもサポートする「終活パートナー」を目指す。先月5日、松江市の葬祭会館では「終活」をテーマ

にイベントを開いた。相続に関するセミナーには2、3年前までほとんど参加者がいかなかったが、今回は相続税の税制改正前の関心の高まりもあり、多くの人が聞きに来たという。入棺体験も昨年初めて実施。営業部の穂山貴彦次長は「以前は葬儀会社もこんなことやっていいのかわからない足踏んだが、今はメディアにも取り上げられハードル下がってきた。生き方を見つめる視線が変わるのではないかと話している。(寺尾佳恵)

記者の追

